

# 自ら学び続ける子どもの育成

## ～人との出会いや体験活動を重視した社会科授業をとおして～

西川 恭矢・田中 伸一

平成 29 年版の学習指導要領では、学校における学習指導の目標がそれまでの「学力」の形成から「資質・能力」の育成に転換された。「子どもは学ぶ力などの資質、能力を潜在的に持っている」<sup>(1)</sup> とするならば、教師の役割は子どもがそのような力を引き出し続けられるような学びを創造していくことにあるといえる。

教師によって与えられる一方的な学習ではなく、子どもが自ら学びを獲得していくためには、学びの原動力となる必然性のある問いの設定、質の高い知識の獲得、「学習活動における情動のストーリーの構想」<sup>(2)</sup> が欠かせないと考える。そのような学びをとおして、子どもたちは主体的に社会的事象とかかわり、他者と対話をしながら自ら学び続けていく力を高めていくのである。

キーワード：自ら学び続ける姿、学ぶ必然性のある学習問題、質の高い知識、教科横断的な学び、情動的な学び

### 1. 研究の目的

本校では、「未来に生きて働く資質・能力の育成」を研究主題に掲げ、自ら課題を見つけ、既有的知識・技能を活用しながら主体的に考え判断したり、自己の学びを俯瞰したりし、よりよく問題を解決する探究的な学びをキーワードとした授業実践に取り組んでいる。

①学ぶ必然性のある問いの設定②質の高い知識の獲得③学習活動における情動のストーリー構想を視点としながら、自ら学び続ける子どもを育成するために必要な学びの要件を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究仮説

実社会で問題解決に向けて取り組む人々とかかわりや体験活動等の情動的な学びを構想することで、必然性のある学習問題が成立し、問題解決に向けて、教科横断的な学びで身に着けた質の高い知識を活用、発揮しながら自ら学び続ける姿が見られるであろう。

### 3. 研究内容・方法

#### 3. 1. 学びの原動力となる問いの設定

澤井 (2020) は、「問いと学習活動の関係を考えることは、主体的・対話的な学びにとっても重要である。その学習活動には、学習展開上の必然性があるか、子どもが見通しをもち、その気になっているかを考えることになるからである。十分に考えるべきは、子どもが問いをしっかりとつかんで、その解決に向けて追究する意欲が高まるように意図されているかどうかということである。追究する意欲が高まらないと、主体的も対話的も形だけのものになってしまう。」<sup>(3)</sup> と述べ、

学ぶ必然性のある問いの設定がその後の子どもの学びに大きな影響を与えることを示している。

また、小川 (2021) は「子どもが本音を語るためには欠かせないものがある。それは根本的に子どもの心を動かすようなきっかけや自分たちはこうありたいという思い、問題状況に対してこうなってほしいという願いである。学習問題が明確になっていることや願いが言語化され全体で共有されていることは、子どもたちの問題解決の意欲、すなわち学びに向かう意欲に大きく作用している。」<sup>(4)</sup> と述べ、子どもの心の動きや思いと学習意欲との関係について触れている。

本実践においては、自分たちの身近にある地域の課題を教材化することで「地域の産業を守り続けるために何ができるか」等の子どもが心を動かし、解決したくなる問いを設定するようにする。

このような「みんなで考えたい問い」との出会い、本校が掲げる自己調整「気付く、決める、動く」の「気付く」を充実させることを意味する。心を動かす気付きがあることで「決める」「動く」といった場面でも主体的に学びに向かう姿が見られると考える(図1)。

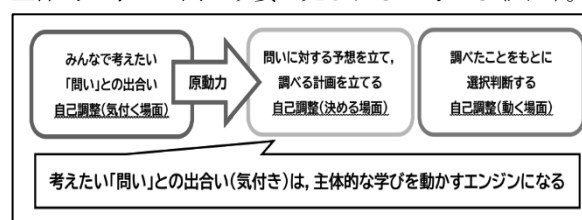


図1 本校社会科部が提案する社会科における自己調整

#### 3. 2. 教科横断的な学びと「質の高い知識」の育成

「質の高い知識とは、単に知っているだけでなく、分かって、使える知識を意味し、学んだことを教室の外にも持ち運べて、活用でき、書き換えられる知識」<sup>(5)</sup> である。質の高い知識を育成するためには、社会科の

学習だけでなく、様々な教科の学びを関連付けて単元を構想する必要がある。本実践では、社会科での学びを他教科に生かしたり、他教科での学びを社会科に関連づけたりするなど、教科横断的な学びを構想し学習問題の解決に取り組んでいく。

### 3. 3. 単元における情動のストーリー構想

藤井(2020)は「単元の構想においては、知識の形成に至る認知的な論理的側面だけでなく、密度の濃い情動の発生と展開という非認知的な情動的側面についても構想されなければならない」<sup>(6)</sup>と述べている。子どもたちは、実社会で問題解決に取り組む人との出会いや体験活動等を通して、様々なことを感じながら学びを進めていくことができる。コロナ渦によって活動が制限される中ではあるが、様々な場面で人との出会いや体験活動を取り入れた学びを展開し、「子どもの心が動く学び」を創造していく。

### 3. 4. 研究方法

仮説の検証授業を行い「子どもが自ら学び続ける姿」を授業記録、子どもの表現物(ノートへの記述、新聞等)、行動観察から捉えることで、研究内容①学びの原動力となる問いの設定②質の高い知識の獲得③学習活動における情動のストーリーの構想の効果を検証し、自ら学び続ける子どもを育成するために必要な学習の要件を明らかにする。

## 4. 授業の実践【3年生における実践】

《単元について》

- ・単元名「太田さんのハクサイ作りと私たちの暮らし」
- ・対象児童 3年A組(30名)
- ・単元計画(全9時間)

### 一次 ハクサイ作りにチャレンジしよう(3時間)

- ・ハクサイの作り方を調べる。
- ・太田先生のハクサイ畑の様子を予想する。
- ・予想をもとに太田先生のハクサイ畑を調査する。

### 二次 太田先生のハクサイ作りを調査しよう(4時間)

- ・自分たちと太田さんのハクサイ作りの違いについて考える。
- ・太田先生がハクサイ作りで大切にしていることを考える。
- ・太田先生のハクサイ作りに対する思いを聞く。
- ・太田先生のハクサイの行方について調べる。

#### 学習問題

『太田先生と自分たちが作るはくさいを比べ、太田先生はどのような思いでハクサイを作っているか考えよう。』

### 三次 ハクサイ作りの学びを、発信しよう(2時間)

- ・太田先生のハクサイの魅力をまとめる。
- ・ハクサイづくりの魅力について発信する。

#### 4. 1. 学びの原動力となる問いの設定にかかわる考察

2学期の栽培活動に向けて、1学期の栽培活動を振り返った。「収穫できて嬉しかった。」「お母さんが『美味しい』と言ってくれて嬉しかった。」と家族が食べてくれたことや「美味しい。」と言ってくれたことがとても嬉しく誇らしかったようだ。

そこで、「スーパーで売っている野菜ってどんな感じなのかな?」ということでスーパーの野菜売り場を見てみた。ナスには太田先生のナスという表示があり、子どもたちは「あっ、まさか野菜先生?」と1学期お世話になった野菜先生(太田先生)のナスが売られていることにびっくり。3Aナスとどんな違いがあるのか実際に触ったり、嗅いだり、眺めてみたり・・・調べてみると色々な違いに気がついた。

＜発見したことまとめ＞

- 見た目：太田先生のナスはツルツル、傷なし、輝いている、形が細長く太い
- 切ってみて：3Aナスは種が多いが、太田先生のナスは種が少なく、色が白く美味しそう
- におい：3Aナスはバナナのおい、太田先生のナスはリンゴのおい
- 触ってみて：3Aナスはちょっと硬い、太田先生のナスは柔らかい

ナスを比べている中で、Kが「太田先生、すごいな。」とつぶやいた。「うん、すごい。こんなナスたくさん作れるんだから。」とクラスの友達も共感した。

違いが出るわけを考えてみると、Nが「太田先生は、休みの日も関係なく毎日お世話しているから。育て方にも工夫があるし、苗も選んで植えてるはず。」と話した。みんなも納得した。Wは「太田先生と比べて負けない野菜を育てたい!」と熱い思いを伝えた。「でも、難しいかも・・・」、その時、Yが「頑張れば作れる!でもお世話する覚悟がいる。」と伝えた。みんなも「1学期も野菜育てたし、虫対策のことも知ってるからできそう!」と太田先生と同じハクサイを育てることが決まった。Tが「太田先生に食べてもらいたいな。」YやNが「太田先生に美味しいって言ってもらいたい!」Oが「太田先生より、美味しいハクサイを作りたい!」との発言を聞いて、「それ、いいね!」とクラスみんなも共感した。Sが「作りたい目標は太田先生のハクサイ。負けないように一生懸命育てたい!」と目標が決まった。

#### 4.2 教科横断的な学びと「質の高い知識」の育成にかかわる考察

CHANGE（総合）と社会科をカリキュラムデザインすることを考えた。カリキュラムデザインすることによって、CHANGE で実際に栽培を体験し自分たちの思いを実現する活動を、社会科で同じハクサイを作る農家の工夫や努力、思いを学習できるはずであると考えた。CHANGE で実際にハクサイ栽培を行い、直面する様々な問題の解決に向かって試行錯誤し、人や野菜との出会いによって育てられるハクサイに対する思いが、社会科の農家の思いの学習に生かされ、社会科で農家の工夫や努力、思いを学ぶことにより、CHANGE で毎日のお世話に生かしていけるはずである。CHANGE、社会科で学んだことが学習を行う上で、お互いに作用し、切実感をもち探究していけると考えた。

CHANGE 【My 野菜を育てよう】

～美味しい夏野菜を育てよう～

CHANGE 【My 野菜を育てよう】

～美味しい冬野菜を育てよう～

CHANGE 【My 野菜を育てよう】

～みんなに届け 3A 市場 野菜の魅力～



社会科【畑ではたらく人々】

生産の仕事のこと、生産者の思いや努力について学ぶ農家の仕事に対する思いや願い、実現するための工夫や努力について学ぶ。

社会科【お店ではたらく人々】

販売の仕方、販売者の思いや消費者の願いにこたえる努力について学ぶ。

#### 4.3 単元における情動のストーリー構想にかかわる考察

ハクサイ農家の太田先生が登場し、苗の受け渡しとハクサイ栽培について話を聞いた。苗作り、土・畝作り、お世話について太田先生の話聞く中で、Mが「農家さんプロやな。手間がかかっている。」と自分たちが考えていた以上の太田先生のハクサイに対する向き合い方を知り、驚きを表した（図2）。



図2 太田先生との観察

①太田先生の話を聞いて、毎日自分たちがやること・大切にしたいこと  
ハクサイ育てたら水の量と日によって変える  
ことで暗れたらたくさん水をやり、雨の日は水やりを減らしたり雨によって土の様子や葉が  
どうなるかわからない気がしたらいいと思っ  
ます。ハクサイを育てたらハクサイを大切に  
に育てたいし太田先生に負けたいくらいに  
ハクサイ育てたいです

苗を植えてから毎日様子を共有した。

<嬉しい成長>

- ・成長点から新しい芽が出た
- ・太陽が良く当たっていた
- ・葉が大きくなった
- ・葉の枚数が増えた

<困った>

- ・葉が食べられた
- ・葉が丸まった

困ったことの原因を考える。OやN・Kが葉にバッタやイナゴが乗っている写真を見せながら、「虫が来て食べているのではないか。」と話した。N・Hは「バッタは草を食べるから、ハクサイの葉っぱも食べるかも。」と話すと、M・K「バッタが生きるためには、食べないといけない。」、その話を聞いてM・S「ハクサイにも命があるし、育てて家族やみんなで食べたい。」とバッタやハクサイ両方の立場での考えが出された。N・Y「両方の命を守りたいから作戦を考える。」と話すと、みんなが納得し、「ハクサイの命と虫の命を守ろう！」というテーマを決め、作戦を考えることになった。S「虫が寄ってこないようにしたら、殺さなくていい。」からネット作戦・スプレー作戦・虫よけ作戦が考え出され、各自が取り組みを決めた。（図3、図4、図5）



図3 カラー作戦



図4 ネット作戦



図5 スプレー作戦

自分たちが育てているハクサイも大きくなっている中で、太田先生のハクサイの様子が気になっている。そこで、太田先生のハクサイの様子を資料として提示した。比べることで「自分のハクサイの方が太田先生より大きい!」「でも、太田先生のハクサイの葉は虫に食べられていない。まだ何か作り方に違いがあるのかも。」「どうしたらこんなに大きく育つの?」と3Aと太田先生の作り方の違いについて予想を考え、調べることにした。

「太田先生の1日（ハクサイ農家の1日の作業）」と自分たちのお世話を比べると、違いが見つかった。毎朝早くからたくさんハクサイに水やりをしたり、観察をすることを知り、「すごい！」「自分たちも見習いたい！」「でも、こんなに広いハクサイ畑のお世話は大変すぎる。」と農家のすごさに驚いた。太田先生は毎日休まずお世話を頑張ることができるのかを考えると「食べる人に『美味しい』と言ってもらいたい」というハクサイのおいしさを伝えたいという考えや、「ハクサイの命を預かっている。自分たちの子どものような存在」と自分たちが大切にお世話してきたからこそその思いが生かされた。

子どもたちは太田先生がどうして農薬を使うのか気になっている。「農薬って健康に良くなさそう…」みんなが農薬にもっているイメージがあるからだ。

太田先生の話聞いていく中で、「自分がお客さんだったら、虫がついてる野菜買わないと思う。お母さんも虫苦手だし。」「周りの農家のことも考えないといけないもんね。自分の畑はいいけど、病気や虫が広がってしまうと大変。」「農家さんは、命を大切に考えているけど…やっぱりハクサイの命を一番大切にしたいよね。みんなに食べてもらいたいもんね。」と、太田先生の農家の仕事としてのハクサイ作りに対する工夫や努力、思いを感じた。

子どもたちは虫対策についてまだまだ知りたい、農家に話を聞きたいと農家の工夫に興味津々であった。そこでハクサイ農家の方にゲストティーチャーとして来ていただいた。

### ～川村農園の川村先生～

「食べても安全な野菜を作る。そのために、虫対策は自然のもの使う。虫はキク科が苦手。」と昔から伝えられてきたことを大切にしている姿勢に触れた。子どもたちは、「キク科のタンポポを植えたら効果ありそう。」など今まで自分たちが考えていなかった虫対策に驚いていた。

### ～無農薬農家の中村先生と出会う～

中村先生の「無農薬農業は虫が来て当たり前。だから毎日の観察が欠かせない。1匹1匹の虫取りも必要になる。本当に手間がかかるから、たくさんは作れないし、形もよくない。でも、安心して食べられるハクサイを作りたい。」という話を聞いた。子どもたちは、「諦めずに自分たちの育て方を続けて行きたい。」「スーパーで売られている綺麗な野菜をたくさん作るって本当に大変なことなんだ。」「農家を助けるためにJAが安心できる農薬の使い方を指導したり、より安全な農薬を研究したりしていることは知らなかった。」と自分たちが日ごろ食べているスーパーで売られている野菜の事実を知り驚いた。そして、自分たちが買いたいと思う野菜を作る農家の工夫や努力、野菜作りを支える

JAの存在に気づくことができた。

他にもJAの営農指導員、JAやろう会（農家さんたちのグループ）にも来ていただき、一緒に観察しながらたくさんのお話を教えていただいた。

### ～出水にある太田先生の畑との出会い～

3A畑のハクサイを収穫して、みんなの目標であった「太田先生の『おいしい！』と言ってもらえるハクサイを作ろう！」を達成できたのかを確かめるために太田先生（出水）の畑に行く。「まだまだハクサイのことについて分からないことが多い。現地に行ってみて調べたい。」との発言があり、4つの目的に整理した。①太田先生に食べてもらう②ハクサイ比べをする（味や形について）③太田先生の畑の調査（土や周りの様子）④太田先生の畑がある出水の様子の調査となった。

出水を実際に歩くと、「大門川が流れている。」「畑の周りに用水路が張り巡らされている。」「地図記号では田んぼだったのに、冬にたくさんハクサイを育てているのはなんで？」「太田先生だけじゃなくて、周りもハクサイ畑だ。」などの発見があった。

太田先生の畑では、ハクサイ専用の道具や収穫の仕方を学んだ。畑には放置されたハクサイがたくさんあり、「これは売り物としては出荷できない。でも、味はほとんど同じ。」と言う話を聞き、「見た目もほとんど同じなのに…割って見て少し葉の縁が茶色なだけなのに。太田先生は厳しいな。でもそれがプロなんやな。」とプロである農家と自分たちの栽培活動との違いに気付く場面もあった。味比べでは、3Aハクサイと太田先生のハクサイを食べ比べた。自分たちのハクサイのおいしさにびっくりし、笑顔がこぼれた。太田先生からも「とてもおいしい。すごいハクサイやなあ。」と絶賛いただいた。子どもたちから拍手が起こった（図6）。



図6 ハクサイ栽培について調査を行う子どもたち

一人一人が愛情をもち約3か月半お世話を続けたMyハクサイの収穫を行った。収穫直前の子どもたちは、「うれしい！」「みんなに食べてもらえるから楽しみ！」とわくわくしていた。しかし「3か月毎日お世話してきたから悲しい。」と別れを惜しむ声もあり、「色々な気持ちが混ざり合っている。」と話す子どもが多くいた（図7）。



図7 3Aの農園のハクサイの収穫の様子

#### ～3Aハクサイと地域の人たちの出会い～

子どもたちからは、「太田先生に『美味しい。』って言ってもらえた。家族にも『美味しい。』って言ってもらえた。次は、近所の人や和歌山に住んでいる人にハクサイの良さを伝えたい。」と今後の目標を決めた。より多くの人にハクサイの良さをと届けるために、ハクサイの漬物に加工し、日持ちもするようにした。味を知ってもらうことに加え、ハクサイについて自分たちが経験したこともまとめ発信した(図8)。



図8 ハクサイ栽培についてまとめた新聞

#### 4.4. 本実践(3年生)のまとめ

子どもたちは実際に自分たちでハクサイ栽培をすることにより、どんどん意欲的に学習に取り組む姿勢が見られた。自然や天気が相手になるので、思いもよらない問題に直面しながらも、試行錯誤しながら粘り強く取り組んでいった。ハクサイ栽培を続ける中で、多くの農家との出会いにより、自分たちが普段食べている野菜に対する見方や思いも変化してきた。普段自分たちは「綺麗な野菜を買いたい、食べたい。」と思っていたが、いざ自分が育て、食べることを考えた時に農薬の使用を躊躇した。「農薬を使うのか?」どうかをみんなまで話し合ったり、ハクサイ農家である太田先生、無農薬農家である中村先生(西ノ庄)、川村先生(有田川)、JAやろう会の方たち(農家)に相談したりする中で、「3Aでは誰もが安心して食べられるハクサイを作りたい!」と自分たちの栽培の方針を決めて取り組み続けた。この問題に直面することにより、スーパーなどで販売されている同品質の野菜を作る難しさを実感した。出水の畑見学を通して、実際の畑の広さ、環境、地形など実際に感じ取り、地域で営まれてきたハクサ

イ栽培についての学びを深めることができた。

野菜や人との出会いや関わりの中で、「どうしてかな?」「自分も〇〇してみたいな。」という思いが生まれ、その目標を達成できるように繰り返し試行錯誤をしながらかわり続け、自分のこととして学びを深める姿は今後の主体的な学びにもつながっていくのではないかと期待している。

### 5. 授業の実践【5年生における実践】

《單元について》

- ・單元名 「海とつながる人々の暮らし」  
—和歌山の漁業 守り続けるプロジェクト—
- ・対象児童 5年B組(30名)
- ・單元計画(全16時間)

#### 一次 日本や和歌山の漁業を調査しよう(3時間)

- ・日本が世界第6位の海洋国家であるという事実から日本で獲れる魚の種類について調べる。
- ・日本で獲れる魚の種類をまとめた白地図から、地域の漁業を取り上げ和歌山県の漁業について調査する。

#### 二次 学習問題を設定しよう(2時間)

- ・和歌山県の漁業を調査して考えたことを出し合い、学習問題を設定する。

##### 学習問題

『これからも和歌山の漁業を守り続けていくために大切なことを考えよう。-5B 和歌山の漁業を守り続けるプロジェクト-』

#### 三次 学習問題の解決に向けて、調査しよう。(8時間)

- ・漁師の方や栽培漁業センターの方とのかかわり、アンケート調査等を通して、学習問題について考える。

#### 四次 解決策を考え、発信しよう。(3時間)

- ・和歌山の漁業を守り続けていくために大切なことについて話し合い、考えを深める。
- ・大切だと思う取り組みについて発信する。

### 5.1. 学びの原動力となる問いの設定にかかわる考察

スーパーの広告を使った調査活動とおして、自分たちにとって身近な和歌山県でも多くの種類の魚がとれていることに気付いた子どもたちは、「和歌山の漁業についてももっと詳しく知りたい」という思いをもった。そこで、県振興局の方をお招きし、和歌山の漁業の現状などについて教えていただく時間を設定した。

その学習の中で、和歌山県の漁獲量が全国32位であることを知った子どもたちは、「豊かな海が近くにあるのに、なぜ和歌山の漁獲量は低いのか?」といった疑問をもち、「このままでは、自分たちが暮らす和歌山の魚が食べられなくなってしまうかもしれない」という危機感を抱いた。

和歌山の漁獲量が全国32位という事実は、教師が伝えることのできる情報である。しかし、この事実を

教師が与えても子どもたちが問題意識をもつことはなかっただろう。実際、漁業の問題に向き合い日々取り組みを進めている方からの情報だからこそ、子どもたちは和歌山の漁業に危機感を抱き、「なぜ、和歌山の漁獲量が低いのか？」という問いをもつことができた。

下記に本授業での子どもたちの振り返りを示す。

振興局の人の話を聞いて、海を守る活動や漁師を支える活動があることがわかりました。～中略～ 農林水産業の全てで後継者が減少しているようです。昔では7000人ほどいた漁師が今は2400人まで減っているそうです。私もこれからの水産業を守っていけるように積極的に活動に参加したいです。

本児以外にも9名の子どもが「漁業を守るための活動がしたい」という言葉を記していた。実際に問題解決に取り組む人の生の声を聞くことで、和歌山の漁業に対する危機感をもち、自分たちにできることを考える姿につながったと考える。

また、広島県で暮らす叔父が漁師ということもあり、漁業の学習に対する問題意識が高かった子どもは、本学習における学びを下記のように振り返った。

私は自給率の低下に漁業の問題が関係していると思います。～中略～ 和歌山の漁業を守るために三つのことをすればいいと思いました。一つ目は、骨が嫌で魚を食べる人が減っているので、寿司や刺身をアピールする。二つ目は、後継ぎの減少を止めるために私たちの世代が「漁師の仕事は楽しい」と思えるようにアピールする。三つ目は、環境を守る。環境の悪化によって日本の漁業がピンチになっています。この問題を解決するためには、呼びかけが大切だと思いました。

本児は、和歌山の漁業を守り続けていくために必要な取り組みとして「①魚食離れを防ぐ②後継ぎ問題の解決③環境の保全」を挙げている。これらの振り返りをもとに「和歌山の漁業を守り続けていくために何ができるかを考えよう—5B和歌山の漁業 守り続けるプロジェクト—」というみんなで解決したい問いが設定されていった(図9)。

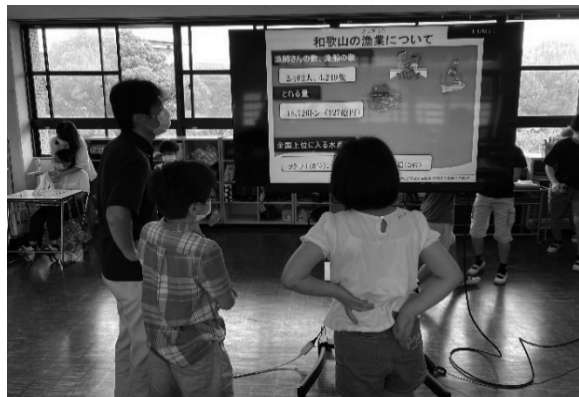


図9 休み時間に振興局の方に質問する子どもたち

## 5.2. 教科横断的な学びと「質の高い知識」の育成にかかわる考察

全体で学習計画について考える中、プロジェクトを達成するために、「実際に漁業に携わる方」「海的环境について危機意識をもつ方」に出会う必要があることが確認された。ここで子どもたちの学びの主体性を高めるために、「ゲストティーチャーへの依頼は自分たちです」という「しかけ」を行った。子どもたちからは、「どんなことを教えてもらいたいかはっきりしておいた方がいい。」「いつ来てもらうかも決めておく必要がある。」「失礼のないようにきちんとした言葉遣いで話さなければならない。」等の意見が出された。そこで、ゲストティーチャーの方に何を教えてもらいたいかを確認する話し合いがもたれた。子どもたちは、これまでの自分たちの学びを省察し、他教科で得た知識やまとめ方を活用しながら、より問題意識をもって、ゲストティーチャーの方と出会う準備を進めることができた。

また、「失礼のないようにきちんとした言葉遣いで依頼する。」を達成するために、国語科「敬語」の授業で「KさんやNさんにきちんとした言葉で依頼できるよう敬語を学ぼう。」という学習問題が設定された。子どもたちにとって、学ぶ必然性を感じにくい敬語の学習であるが、「ゲストティーチャーの方に失礼のないように依頼したい。」という思いが伴った学習であったため、使うべき敬語について必然性をもって学びに向かう姿が見られた(図10)。



図10 国語科での学びを生かしゲストティーチャーに依頼する様子

後日、漁師の方が来校された際、「丁寧に話してくれて嬉しかったです。みんなの敬語はとても素敵でした。」という評価をいただいた。漁師の方に自分たちが使った敬語に対するフィードバックをいただいた子どもたちは「敬語」を使うことで相手への敬意が伝わることを実感したようである。

これ以降、様々な学習の場面で、敬語を使いながら積極的に電話取材を行う姿が見られている。

### 5.3. 単元における情動のストーリー構想にかかわる考察

#### ①課題解決に向けて取り組む人々との出会い 地元漁師Kさんとの出会い

地域に続く伝統的な一本釣り漁業に携わるKさんは、代々続く漁師の家系で生まれ、自身も16歳から漁師として海に出ている。授業では40年以上、和歌山の海で漁業を続けてきた経験から感じたことやこれからの漁業への思いを「本音」で語ってくださった。

Kさんの話を聞く子どもたちの表情は真剣そのもので、普段、論理的な学びを得意とする子どもからも「やっぱり人ってお金をかせぐっていうためだけじゃなくて、いろんな思いをもって仕事しているんや。」という声が聞かれた(図11)。自らの仕事に誇りを持ち、問題解決に向けて日々奮闘する人々との出会いは、漁業の問題だけでなく、子どもたちの職業観にまで影響を与えるきっかけとなった。



図11 Kさんとの授業の様子

以下は、本学習における振り返りである。

一番心に残っているのはKさんが、釣ってきた魚をさばいてくれたことです。魚をさばいてくれた時に、豆知識みたいなことをたくさん教えてくれました。それは「さっき釣った魚より、1~2日魚を泳がせた方がおいしい」ということです。なるほどと思ったので、スーパーとかに行ったらこの知識を生かしていきたいと思いました。今日は、Kさんが来てくれてとても勉強になりました。そして、私ももっと海を大切にしようと思います。

「一番心に残っているのは・・・」という表現から、Kさんとの出会いが情動を伴う学びであったことが読み取れる。また、「私ももっと海を大切にしようと思いました。」という表現からは、問題解決に向けて本気で取り組んでいる人に影響を受け、自身の生き方につなげようとする姿がうかがえる。

また、Kさんとの出会いを通して、漁業の問題を「自分とかかわりのある問題」として捉える子どもの姿も見られた。

Kさんの話を聞いて、漁業は自分たちとつながっているのだと思いました。よくよく考えてみると、環境問題も後継ぎ問題も自分たちとかかわっていると思いました。なので、海に漁に行っている漁師さんに「がんばれ」という声をかけるかわりに、漁業の問題を自分たちで解決していく。自分たちで漁を支えていくことが大切だと思いました。そんなことを思いながら、後継ぎ問題の解決策を考えました。これも漁業の支えになっているとうれしいです。

本児の学びは、まさに社会科が目標とする「自分事として社会的事象を捉え、考える姿」である。魅力ある地域の方との出会いを通して、心が動いたからこそ「自分事の学び」であると考えられる。

#### ②栽培漁業センターNさんとの出会い

栽培漁業センターで働くNさんは、センターでの取り組みだけでなく、ここ数年肌で感じている海の変化についてもお話しくくださった(図12)。Nさんの話から人々の便利さと引き換えに海の環境が悪化していることを知った子どもたちは、自分たちの生活の在り方についても考えを深めていった。



図12 Nさんとの授業の様子

授業の後半、Nさんは「あくまで個人の意見ですが・・・」と前置きをした後、自分が感じている海の変化を本音で語ってくださった。Nさんの本音に触れた子どもたちからは、「人間が求めている豊かさって何?」という声も聞かれた(図13)。

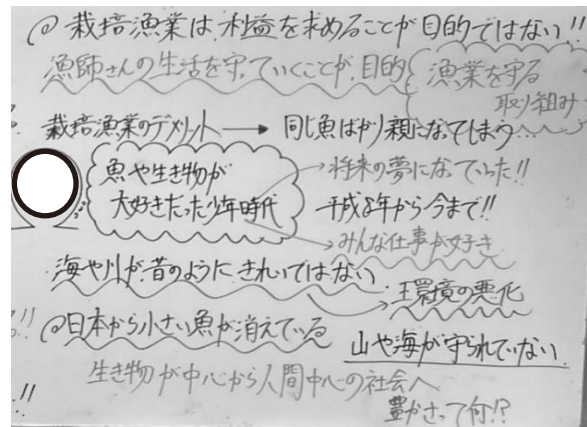


図13 Nさんの本音と子どもたちの意見をまとめた板書

本学習における振り返りは以下のとおりである。

私はNさんの話を聞いて、自然を守ることは何かを考えました。私は、その答えは「本当の豊かさを取り戻す」ということだと思います。ここでいう本当の豊かさとは、生き物中心の世界のことです。今は、人間中心で自然が守られていないと感じています。これは、私たちが便利を求めすぎた結果だと思います。自分たちでやってしまったことは、自分たちでもとに戻そうではないかと思います。でも、1人の力じゃ無理なので、今こそみんなで力を合わせる時だと思います。

社会科は、社会の在り方について理解させることはもちろん、人間としての生き方についても深く考えさせる教科である。本児は、Nさんとの出会いをとおして、自然と共生する生き方について考えを深めることができている。また、「自分たちで・・・」や「みんなで力を合わせる・・・」といった記述からは、海の環境の悪化を自分事と捉え、問題解決のためにできることを考えている様子が見受けられる。Nさんの「本音」に触れることで、密度の濃い情動が発生している。この学習後、本児は3回にわたって海の環境問題について自主的にノートへまとめ、多くの知識を獲得していった。情動を伴う学びが原動力となり、教師が指導しなくとも自ら知識を獲得していく姿が見られたのである。このような学びの姿こそ、本実践で目指す「自ら学び続ける子ども」の姿である。

また、ほとんどの子どもがNさんとの授業をとおして一番心に残ったこととして、「海の環境問題」を挙げていたのに対し、ある子どもは「Nさんが仕事を始めた理由」が一番心に残っていると記している。本児は、Nさんとの出会いを通して、様々な職業に興味をもち、その仕事に携わる人々の思いについて迫る自主学習をスタートさせた。自主ノートを発表する際は、「いろんな仕事があるけど、みんなその仕事に対して思いがある。それは同じこと。」と発言する姿も見られた。人との出会いをきっかけとして、自身の生き方や職業観について考えを深めることができたのである。

今日ぼくは、Nさんにいろいろなことを教えてもらいました。中でもNさんが仕事を始めた理由が心に残っています。魚や生き物が大好きだった少年時代から、魚に関する仕事が将来の夢になっていたそうです。でも昔とちがって、海がきれいではなくなっているということを知ってしまいました。ぼくも環境について対策をやらないとダメだと思います。

令和の教育として個別最適な学びが挙げられているが、当然ながら同じ学習をしてもそれぞれが感じることには違いがある。このような「違い」が「伝え

る必然」「聞く必然」につながり、協働的な学びをより豊かなものにしていくと考える。実際、お互いの発表を聞き合った子どもたちからは「自分にはそういう考えはなかったから、考えを広げるためにもやっぱり伝え合うって大切だと思う」といった声が数多く聞かれるようになり、他者と協働することの「良さ」を実感しながら学びに向かう姿が見られた。

心を動かす情動的な学びを構想することで子どもたちは自分らしい学びを進めていくことができた。

## ②情動的な学びが生む「自分事」の学び

単元の終末には、これまでの活動をとおしてそれぞれが考えた「和歌山の漁業を守り続けるために大切なこと」について話し合う時間を設定した。以下に3名(Y児、S児、M児)の子どもの授業前後の学びの変容について示す。

### Y児

#### ☆前時 (プロジェクトで一番大切なことは?)

ぼくは「環境・後継ぎ・消費者」から「消費者・環境・後継ぎ」に変わりました。理由は、今回の魚離れ調査でかなり魚離れが進んでいることを感じたからです。この魚離れはとめられるならいいけど、とめるのはかなり難しいと思います。今は、魚よりもおいしいと食べ物を食べる人が増えているからです。



#### ★本時 (プロジェクトで一番大切なことは?)

ぼくはこのプロジェクトを成功するためには、今までにこんなことをした人を調べたり聞いたりしてヒントをもらえばいいと思います。いなかったらこのことを全員でしっかり考えてみたらいいと思います。理由は、プロジェクトについて「きれいごとだ」とか「無理だ」と思っている人がいるから、そうではなくできないかしっかり考えることが大切だと思ったからです。NさんとKさんの思いも足して考えたらもっと深まるかも・・・

前時では、魚離れを止めることが一番大切としつつも、「とめるのはかなり難しい」と記しているが、本時の振り返りには、「きれいごとだとか無理だと思っている人がいるから、そうではなくできないかしっかり考えることが大切」というプロジェクト成功への思いが記されている。本児は、情動的側面の学びではなく、論理的側面の学びを得意とする子どもである。道徳科でも常に合理的に物事を判断し、伝統産業を取り扱った学習では、「利益が出ない伝統を無理して続けていく理由が分からない。」と発言した。しかし、「NさんKさんの思いも足して考えたらもっと深まるかも・・・」という振り返りからは、漁業に本気で向き合う人との出会いをとおして情動的側面の学びを豊かにしていることが読み取れる。



また、本児の「今までこんなことをした人を調べたり聞いたりしてヒントをもらえばいいと思います。」という記述をもとに、学級全体で持続可能な取り組みの成功事例について調べる活動がスタートした。

S児

☆前時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくは「後継ぎ・環境・消費者」で前とは変わりました。なぜなら漁師がいなくなると魚すら食べられなくなるし、海に魚がいなくなっても魚が食べられないからです。そしてなぜ食べる人の減少を最後にしたかという食べ人が少なくなっても魚が食べられる。アンケートをしたけど魚が好きな人が意外といたので最後にしました。

↓

★本時（プロジェクトで一番大切なことは？）

ぼくは今日、授業をして思ったことが二つありました。一つずつやっていってもだめなんじゃないかということです。なぜなら環境問題をよくしてもその間に漁師がいなくなる。でも漁師が増えても魚離れが進んでいるから食べる人がいない。だから一つずつは無理なんじゃないか。だから三つを少しずつしていけばなおるかなと思って、その理由は何人も人が必要だからです。だってたった一人がやっただとしても変わりません。十人でも百人でも和歌山の人、全員くらいいないと達成できない。もし、できたとしてもリバウンドしてしまったらまた一から。だから本当に守り続けていくのは難しいんじゃないかなと思いました。だからこそ世界を変えるのは大変と言われているんだなと思えました。でも、世界を変えるために考えていきたいと思います。

前時では、魚食離れが漁師の減少につながる（漁師の収入が減少するため）が理解できていないが、本時の振り返りでは、「3つを少しずつしていけばなおるかなと思って・・・」と記していることから分かる通り、すべてつながりのある問題であることに気付くことができている。また「だからこそ世界を変えるのは大変と言われているんだなと思えました。でも、世界を変えるために考えていきたいと思います。」という記述からは、大変なことがあるがそれに立ち向かい状況を変えていきたいという思いが伝わってくる。このような姿も問題を自分事として捉えている姿であると評価している。

本児は、授業中に全体で一度も発表していない。一見すると仲間の発表を聞いていないようなそぶりも見られた。しかし、振り返りの記述からは、仲間の発表を受け自分の考えを再構成している様子が見受けられる。このような学びの事実から、あらためて目うつる姿だけで子どもを評価することの危うさを実感することができた。子どもたちの多様な学び方や学びの姿を認めることも令和の日本型学校教育が目指す個別最

適な学びの実現のために必要な姿勢であると言える。

M児

☆前時（プロジェクトで一番大切なことは？）

私は、前と変わって全部大切だけど①の魚を食べる人の減少問題をなんとかしなくてはと思います。環境が昔のようになっても意味なくはないけど魚を食べる人を増やせたり漁師を増やせたりするわけではないと思うからです。もちろん環境はいいほうがいいけど、後継ぎ問題・環境問題が解決しないとプロジェクトができないからです。なのでこの順番です。

↓

★本時（プロジェクトで一番大切なことは？）

私はプロジェクトが達成できるかわかりません。なぜかというHちゃんが自主的にポスターをつくっているのはすごくいいことだけど、ふつう道を歩いているときにポスターがあっても見る人が少ないと思うからです。だけども守りたい、漁業も守りたいけど5Bだけのみんながやってもそこまで意味がない。だからきれいごとなのかなと思いました。けれどももちろん漁業を守り続けたいと思います。だからポスターより影響力があることをしたらいいと思うけどそんなにかないかなと思います。

本児は、プロジェクト開始当初から、問題を自分事と捉え、自分たちにできることを積極的に行っていく必要性を訴えてきた。また「全部大切だけど・・・」という記述からは、それぞれの取り組みのつながりについても理解していることが読み取れる。しかし、本時の振り返りでは、「私はプロジェクトが達成できるかわかりません」や「だけども守りたい、漁業も守りたいけど5Bだけのみんながやってもそこまで意味がない。だからきれいごとなのかなと思いました。」という記述が見られる。一見すると、前向きな思いが変化したように思える振り返りであるが、本児は5Bプロジェクトを教室だけで完結する学びではなく、実社会に働きかける学びにしたからこそ、その難しさを実感し、問題についてより深く考えをめぐらせているのではないかと。

実際、本児は授業終了後すぐに担任のもとをおとずれ「参観しに来てくれた大人の人達に聞きたいことがあります。聞きにいいですか？」と許可を求めてきた。（あいにく、授業を参観した先生方もその後の予定があり、すぐに教室を後にしたため、聞きたいことは聞けずじまいになってしまった。）

本児は教室にいた数名の大人に「漁業の未来について本気で考えている大人はどれくらいいますか？」と質問をしたかったようである。先ほどの子ども同様、本気で世界を変えたいからこそ、世界は簡単には変えられないことを実感し、自分たちのできることをより深

く考えている姿である。「なかなか変えることが難しい社会を変えるために自分はどのように社会とかかわっていくか。」このような思いこそが主体的に社会的事象について学び続ける原動力となっていくだろう。

### ③「本音」が生む「主体的・対話的で深い学び」

本授業において子どもたちが本当に話し合っていたことは、「和歌山の漁業を守り続けていくためにどのような取り組みが大切か」（授業者は、どの取り組みが大切かを話し合わせることで、すべての取り組みが大切であることに気付かせ、漁業衰退の問題を自分事として捉えさせることをねらいとした）ではなく、「5Bプロジェクトは本当に実現することができるのか」ということであった。授業の中盤にある子どもが「水の勉強したときもそのときは使いすぎたらあかんとかって注意してるけど、家帰ったらお母さんとかずっと出しっぱなしにしてんねん。大人は絶対そういうこと気にしてないと思う。」と発言し、子どもたちの学びが能動的になる姿が見られた。それは、この発言が「本音」だったからこそであると考えられる。その後、「持続可能ってよく言われるけど実際にやっている人は一部の人のだけ」「漁業を守る取り組みも関係ない人は誰もやらないと思う。」といった子どもたちの「本音」が次々と語られていった（図14）。



図14 持続可能な社会について「本音」を語る子ども

自ら学び続けるための学習を展開していくためには、このような子どもたちの「本音」が欠かせない。なぜなら「本音」には、学びを主体的にする力があるからである。今回の実践で本音が語られた理由として、人との出会いや主体的な調査活動等を通して密度の濃い情動が発生したことが挙げられるのではないだろうか。学習後には、「もう一度2人に会って話を聞かなければ、本当に伝えていくべきことが分からない。」「もっと多くの人の思いも知りたい。」といった声があがり、放流や疑似漁業体験を実施することになった。様々な学習場面において情動のストーリーを構想することで子どもたちの学びが自分事となり、自ら学び続ける姿が見られた。

### 5.4. 本実践（5年生）のまとめ

社会には、よりよい社会を目指して様々な分野で日々努力する人々がいる。そのような人々との出会いをとおして、子どもたちは心を動かしながら社会の問題に触れていく。実際、伝統的な加太の一本釣り漁師の方や栽培漁業センターの方に会い、漁業の今後について考えた子どもたちは、「このままでは、和歌山の

漁業が守れなくなってしまう。今までは関係している漁師さんが取り組めばいいと思っていたけど、それだけでは問題は解決していかない。自分たちにも何ができるかを考える必要がある。」といった発言が聞かれた。注目すべきは、漁業における問題点に気付くだけでなく、その問題を解決するために何ができるかを考えている点である。このような姿こそ社会にある問題を自分事として捉え、自ら学び続ける姿であるといえる。

また、今後の社会科の学習で林業を学習することを知った子どもたちからは、「林業にも漁業と同じように、林業の問題を解決するために本気で取り組んでいる人がいると思う。」「林業の問題も結局は、自分たちが何をできるかを考える必要があると思う。」といった発言が聞かれた。漁業の学習を通して、様々な取り組みを行う人々の生き方を目の当たりにした子どもたちは、「和歌山の漁業を守り続けたい」という思いを強くもった。そのような思いは、仲間との意見の交流や主体的な調査活動とおして「自分たちに何ができるか」を考えるきっかけになったが、それは漁業の問題だけでなく、ありとあらゆる分野の様々な問題にも共通して言えることであるという見方・考え方が育ちつつある。今後も子どもたちが社会にある問題を自分事と捉え、未来に生きて働く資質・能力を高めるために情動的な学びにおける研究を進めていきたい。

## 6. 成果と課題

情動面にも留意した学びを創造することで、子どもたちが本気で探究したい自分事の問題を設定することができた。しかし、そのような学びは、往々にして多くの時間を必要とする。今まで以上に教科横断的な視点でカリキュラムを編成していくとともに、学習内容から「見方・考え方」を見るのではなく「見方・考え方」の側から内容を見るというアプローチを試みていく必要がある。そのためにも、「見方・考え方」とは具体的にどのようなものか。そもそも社会科とは何かという地点にまで立ち帰り、学びを創造していきたい。

### 引用文献

- (1) 国立教育政策研究所(2016)「資質・能力 理論編」東洋館出版社
- (2) 藤井千春(2020)「問題解決で育む『資質・能力』」明治図書出版社
- (3) 澤井陽介(2020)「授業づくりの設計図」東洋館出版社
- (4) 小川雅裕(2021)「すべての子どもを探究の主人公にする」東洋館出版社
- (5) 国立教育政策研究所, 前掲
- (6) 藤井千春(2020), 前掲

### 参考文献

- (1) 奈須正裕(2021)「個別最適な学びと協働的な学び」東洋館出版社
- (2) 奈須正裕(2021)「『少ない時数で豊かに学ぶ』授業のつくり方」ぎょうせい